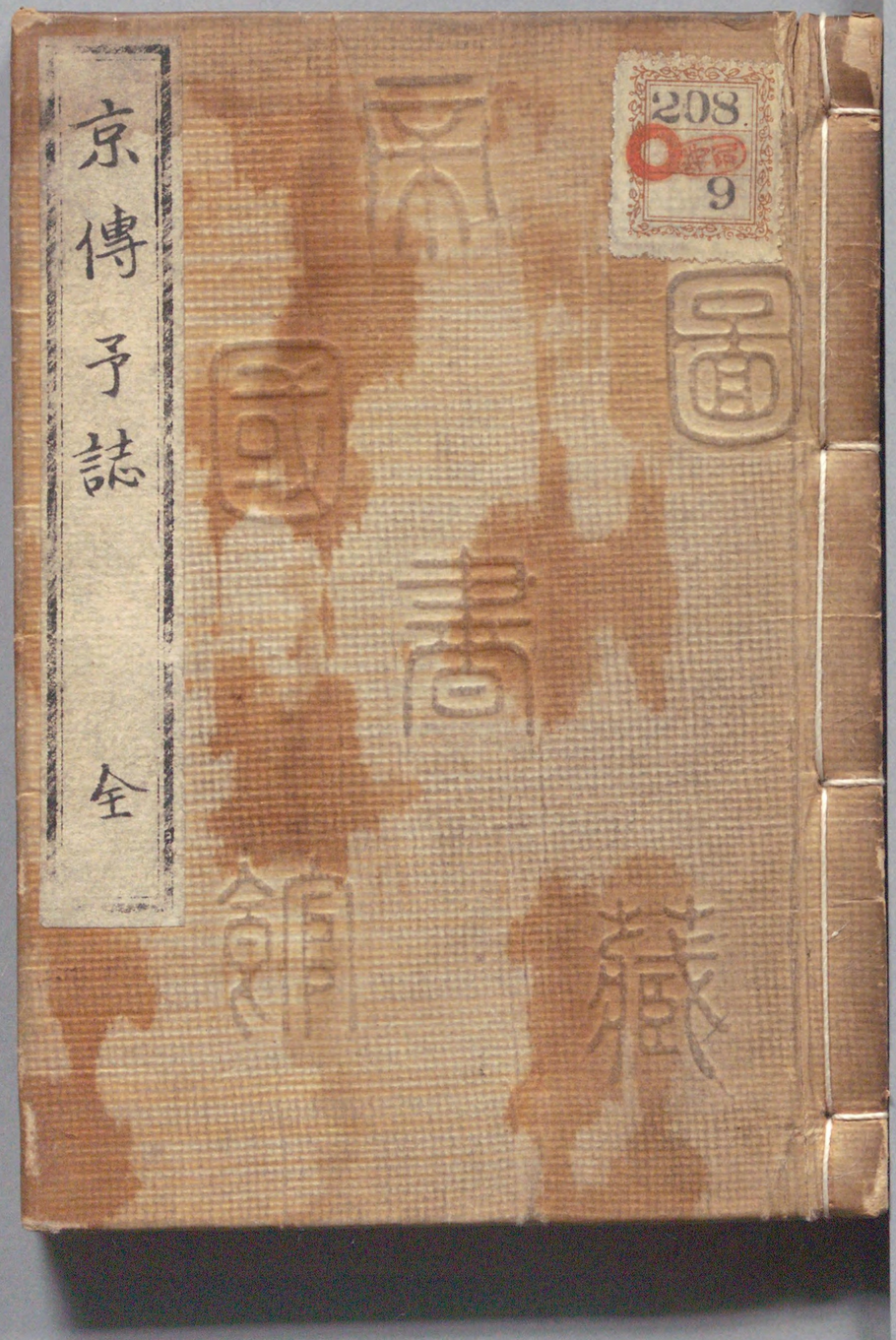


国立国会図書館　京伝予誌 208-9

ガラス使用

京傳予誌

国立国会図書館　京伝予誌 208-9

ガラス使用

寛政二庚戌新鐫

戯作四書

京傳予誌

書肆　大觀堂

帝国図書館蔵書之印

序

近来世よ(を)行(ゆく)る経典(きょうてん)餘師(よのし)
(これ)書(しょ)と閲(けみ)る○閲よ盜(ぬす)梅(み)より扎(ひら)おでん
(これ)をゆ(よ)する実味(じつみ)よ
ろく盲目(めくら)の杖(つえ)剛夜(こわよ)の提燈(ちょうちん)
愚(おろか)圖(ず)ふ八兵衛(はちべえ)をも昭(てら)し○玉手(たまで)

国立国会図書館　京伝予誌 208-9

ガラス使用

の八町を照して徳に入の
大門口より至らしむるなり
○籃輿八此よもくの
○ろうこしけんこし雖然乾坤
俠々徒八馴染のみやと難有
うけん妻作なとハ手よ不觸固

やう人まて大道を学八鱣を
割よ鯨の刀を用が如く是等よハ
○これら
難うん彼等をあつかう庖丁
○よつて
よハ録作者う相應と筆を
操て立あり○已よ艸紙を綯
○それ
なり夫大樂通用とハ申ど

国立国会図書館　京伝予誌 208-9

ガラス使用

○も永禄通宝の代もの○
豊後申と号も○兼好
法師の類よの○狂ハ戯作
の四書しハ恐あり○顔覩ち
ほゝもろ〳〵しれと○頭
巾と見せて頬包む女言か

道寺木曾海道近道の抜裏
○も至る珩ハ芝蘭の室鱣の
店よりかんバしきを一度嗅で
實よ入ると○虚うそ邑の瓢介
等が○鼻毛よりん〳〵まる蠣蝦
こいく○もちみやァ道ハね云
爾

国立国会図書館　京伝予誌 208-9

ガラス使用

山東市隱

京傳自序

嘗

寛政二年庚戌孟陬

戯作四書京傳予誌

目録

○大樂

大ゐの月雪花をおさゝれよはろひ色とゆとふこゝろさしのしんでこゝろことをいきつむ

○通用

通用い質物の通用抔のようにしてひとくちあるとも人の勿論實代

国立国会図書館　京伝予誌 208-9

ガラス使用

○豊後（ぶんご）

豊後いまをさかりとうたひ

○申（さる）

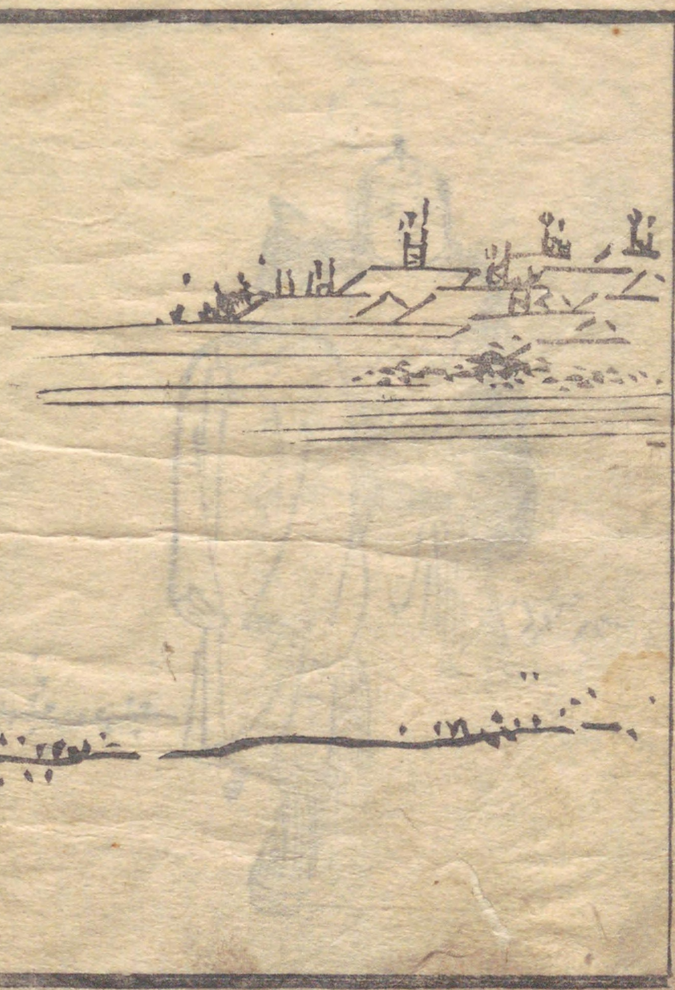
申はまさるとよむ

国立国会図書館　京伝予誌 208-9

ガラス使用

大樂

堅衆曰大樂意氣狂句
鬼角入欲門樂功者之虛言而
人爲樂氣質者獨賴金銀之
損而貪之次之客者必由是
而迷焉則庶乎氣差矣
それ大楽はとりくぐまの川乃



国立国会図書館　京伝予誌 208-9

ガラス使用

汐干よめそびて外代のひろさと称する
もおろかれぞ名の湖乃海そよそまり
てれんまそざよその要奥の名どころと
あんてそめてそぞろけどもそまま
きなり或い上野広小路の花
くるま幇間藝者を引連てい誂行無
常れ鐘よりもやかましむしやう散
る紙会の下りを含ひ武家方れ血

乳盛あるい玉乗そろめい
よいよありたくすてもよ
楽と出るの一月金一分の借馬乃鞭
うんて幸豫の游山もうさよい忽ち
の弱のそづかゆうそ大門よ
あく中れ町の素梯い寛保の昔よ
うろねど人をかどかしざる実法
の君ど名びしそれの慕義傍訳の山

国立国会図書館　京伝予誌 208-9

ガラス使用

とかー桜もひまんかくうろうろされて
生こそそぐよろんろろろ花のくそれを
うー同ま主楽山時も初堅魚ろ
わくれ声よそうでめてなづきのう
夏が来そそかう日いりろうざと
売よ笠くい居績のそさ
客人とそ西ろ芸居績のそさかう人
とかくくーとそれつまりいこを人
訳うむうひよまてお
ものふおなてふこそ
おくいふよそろうの開う雲ってを
さやアうんをんふま
とマア一ツ呑うよの
家もんてふこそりま
とそさいいをそそ
一ツのこ二ツのこつ
三

国立国会図書館　京伝予誌 208-9

ガラス使用

のんて有のうへへさまざまくれ川一流一
てもそひうるあ遣ひありよとそれてと
もお碇とおろし木乃伊とうう蜜
人よあつて遊ふもわり夏ハ墨水
よ游舩とうあ江戸藝者のひろ
うねさどにうみそしんかひとうよ
升八人山人数あれことを涼哉
とにとそひとはうこ弦にてて

ひさそくれ大さそのもんよう
陸よりあとすんて屋うる陽者と思
しさう鳴呼哀あうるお死ひ諜
とところけるも人石
さくうも盛者必衰のうねと
そうそうや千住の悪臭とうく
さくかい臭皮袋とこ云ふよ
ねばねしやのののやうよさりくも

国立国会図書館　京伝予誌 208-9

ガラス使用

国立国会図書館　京伝予誌 208-9

ガラス使用

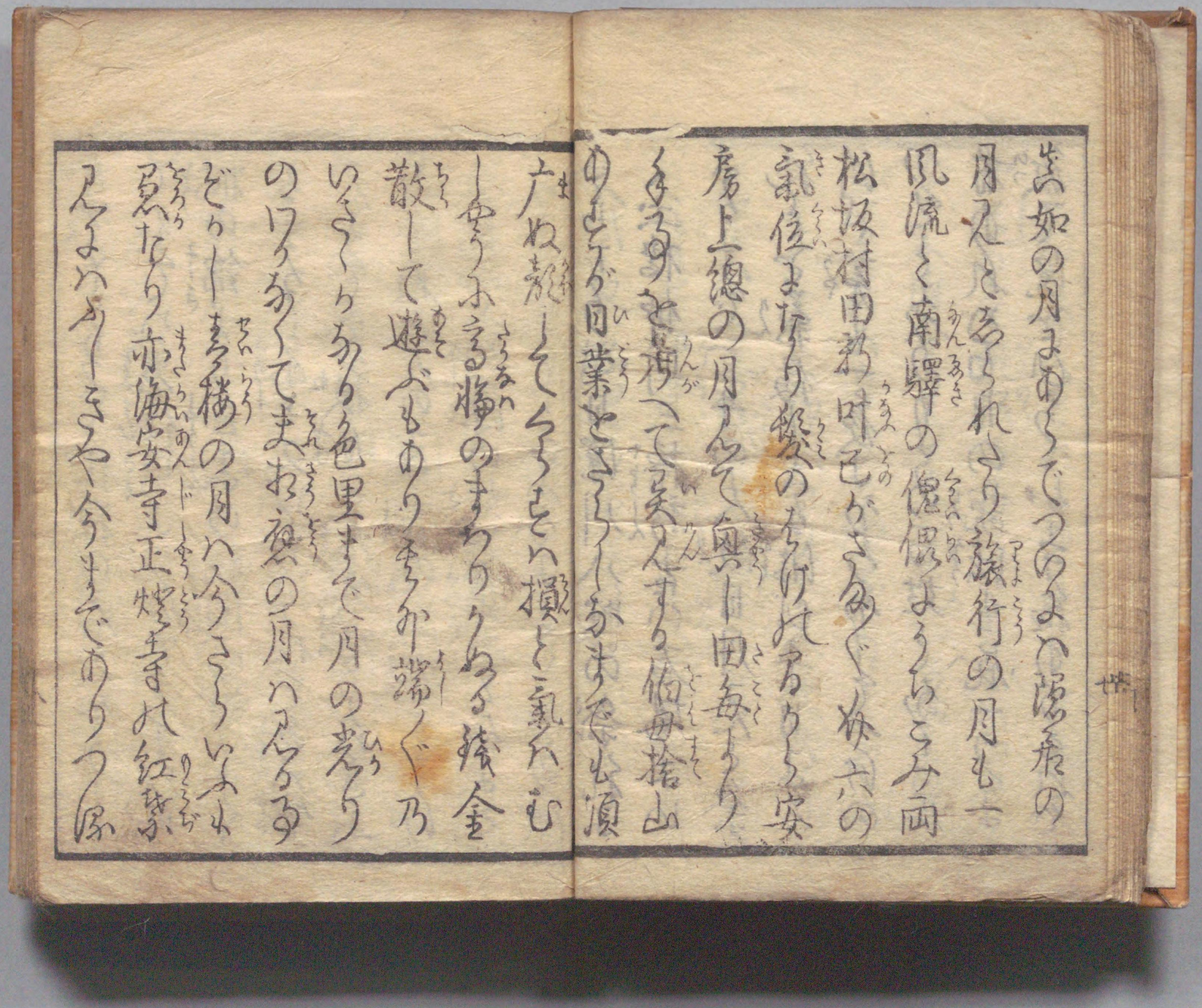
つゞこれも色の二ツ
るより文月い扇の地紙
照一り總角よ棒ぢめ
ふらく 閨夜と
郭毎よりつ
客人の身
いくらさぐり唯人の氣
ぐるぜんまきの用
をおごろせさう
くりとおられぞ鋪弘の燈籠
いてそれもれど女郎
のうちをそこもと
その頽子細立ち名
るしくりと思
こりい正徳の昔中
ぐ追善のよめふ

ゐれど今われそれよひさうえて衆人
と迷ひを煩悩のあらざらんことあらり
を来附合の句よそをいてるのり
さうりのいらうく燈籠のさらく迄
くまことふむべあり十夜乃月
ろよいろも賜も今宵の月とめで
て詩を作哥を詠一興句を按ぞ
又は夜色里のあさりひいこふ

さらなり此日深川八幡の祭礼は
て土橋仲町三橋新古の石場よい
るまで一年の大祭礼と祭
礼とを兼倚しる賑び千日よろ
川さ茅も一夜よりてつけの
ぶせとありりものの石姓とも店
者あれば百日の説法も屁一ツよ
放て院をひらくおさ寺祖のりこれで

国立国会図書館　京伝予誌 208-9

ガラス使用



国立国会図書館　京伝予誌 208-9

ガラス使用

息子ふたりぐ化粧のこんがうし
てそていい鬼住里よこのてるまひ冊
枫の錦より西生の紅園の錦よく
るまうう糸ミ又口そうれとをへ雪
んとて家根舟よ居尖嬉うろふ
めうねろんのる晋の諏安よりけ
ねこ氣で馴染の鼓と権乃雪うんよこ
ろびやまでそうふ勾よよくかろん

こと多が嗜よりむうの活のこうく潔
舟の仏高乳もうんるなり更秋
の角力三ツれ戯場枚田の梅之江
乃活の月之玉川の鮎物生間のお
繁之金沢の雪うん四季おくれ禾
いかぞうんをし維是天地こ細
ユ人の大かうようてよってのこと
くることふーろれども禾い月雪

国立国会図書館　京伝予誌 208-9

ガラス使用

のこツよとぞむこういひあぐらつまる
和ん女色ぞの玉ふとんいかゝ月の
ほさとて女命の胸の辺よそ
雪れ色白ふりとそ抱て寝さた
めしもあく花りのいそねむかづ
くとりてに舌もあそれまり
も眉ん月をまろし肌ん雪をあざ
ひさ次ん姿をそちぢさ在雨よいさま

ど嵐よちろ和美人をそよのむ
ゟく如何ゟよ楽ん
園そ色気ふり吟氣とん飢饉年
ゟ生れさ人の言ゟべくこれ無
量の味ひある女色の極意そね
放そうしと衆人皆是ゟ同仏まて
今時の楽をそんそまほまふふ
女色へそちふり昔も人情よん

国立国会図書館　京伝予誌 208-9

ガラス使用

るる多く夫子衛の君ゞ女よのろ
さゝそてわれいまざ徳とこのむりの
色ともものむが如くもるりのをそぞ
と曰ーなり鬼角於がられいけ乃
の遂ひとゝられさり然れども富迄
れるらなりて都会のるるみーみるさ
くても雅しえがちつくーいとて充
る山よ居續もあらば月の明あり

とて引窓ろうんてい與もかー裸
で雪も面白くびさんれがよのーみへ
女色よくぐむるとれいひかぐらに
まり処金たり金そ沢山あれを
愚あるも奇才とぶれいやーさ
も貴ふく鶴よのうに鯉ま楽ど瓢
うう駒を出ー石をうて羊とふ
を仏御ろりもるうとを残らぐ

国立国会図書館　京伝予誌 208-9

ガラス使用

様并に夫〳〵のやりにツまり
をとゞをとこれ金佛の勢ひとも
ゑさう志ろくべ今をかくて内樂にう
らぬらと思くどんてたよりてたゞ
歓湖に脇とまけて枕そ〳〵ふとこ其
うらよのりとたゑ平おとのくしが
こてを思くをふこれ又今よもなう
を唯心るるべしをの仏のふこと

いふ世の多の俗物より得ず難
されべふこへをゑ身よ為どろ処あり
骨牌よくこと日しものれだ汚よあ
うきね夜まとてもふしこれも己が
妓女のこのみをりて又女くん中
してのそういのうちもふこのも
そうどうりのうち又汚まで
称権の著板こんぐう女房とも

国立国会図書館　京伝予誌 208-9

ガラス使用

国立国会図書館　京伝予誌 208-9

ガラス使用

意氣狂句

若衆曰無錢之謂通不迫之謂用通者半化之貪乏用者紋曰之出入其錢乃寛永年中通寶大夫恐其久而絶也故筆之於丈以授格子其子胥言無理中亂寢客衆不逢

国立国会図書館　京伝予誌 208-9

ガラス使用

其夜爲千里語之則渡苦界
省連則恨藏於店 下畧

それ通といふんぞ列子いふことなり
徳を以て人をいふうえを聖人と謂
財を以て人をいふこれを通人と
謂ふ以言ごとにつりてこんれいより今
の通ふしやうぞう着なめれり然
れども今恨へのうまかやうでも沢

よんよおして居るありさま氣質ハ安く雖
得唯通ふ野まものの差別を知ると
以て通ふ謂ひ通ふ野まとの差別
とそうざうを野まといふんうえ
よ通用の二字を以ていさくうまそこ
ふんをして風諫せんまん万里を井
といひ井を十めの村にして通ふいふ
とりて若れバ千筋里のかまで

もよくせうちをとおつべし
又書の首末全と通そなれど
初會の首よりさきへ
も全くていきうされてのくに未まで
と通くいつべし如来まよこ妙工い通の
廿廿よ圓通あり久米れ仏人も通
とうくてい下界ころと笑れ
狐も通力うせていい鋤町の市まさら

十五

さる吉原通深川通芝居通とのも
よくもちをと得さるをとおつべし又用
の字をいろん天地全功ふし業物
全用ふし又人よ四用ありと人用う
ろく時い下女もくらいまちいれ新造君
とのとぶれ用られざる時い麒麟も
魯人の古傘よ包まれ牡丹紅葉お
類くふらん又傾城の言よ全浪と

国立国会図書館　京伝予誌 208-9

ガラス使用

ゆくゝゝ飯日物日とそのむこれ
と總て用ゝいのあり又兩用
あつて文は用のあつて
酒屋の内用御用の外車雷これ
等よりもつと説かゝ又通用とつ
づ時い質おの通用おのつなり
これよつて頃日一ツの奇談なり
うよま表徳と鳥有こゝ者あり
[illegible]

[illegible]代い飯器よま車をおうけるてゝおの
てゝあれをに行くゝゝゝび一盛い
傾城買よ分とをざねてえよめで月
ようられ雨おもおのび嵐よもあひ
毫ゝ方の臭ひくゝゝねべ布の蜘居を
るゝゝとせそ元旦の座のよれ史
より大三十日れ拾要事る頃まで
月雪花の三ツ蒲団のよゝ寝し

国立国会図書館　京伝予誌 208-9

ガラス使用

て他念(ねん)なくうしろもそむきもせずまもりゐて
ときうつて而后(のち)世(よ)よに隙(ひま)なくて蓑(この)
蝨(しらみ)の別業(ぐぎょう)よりさことみ孤獨(こどく)の
も世(よ)とのぶらまそうも知るべし
されば昔(むかし)ときくる梅屋流(ばいおくりう)の三味
線もむの根(ね)よりけびうな家の
細(ほそ)めくれど憂世(うきよ)と望(のぞ)チヨ
口の節(ふし)よ結(むす)びも扇(おうぎ)も安(やす)れば

ひとりか住吉屋(すみよしや)の煙管(きせる)よりのや
ふを通(とを)し小人閑居(しょうじんかんきょ)して不善(ふぜん)とか
そのいましめを考(かんが)へよわをれねばうん
しゅも片肌(かたはだ)をぬぎて脇下(わきした)よをちら
つき腕(うで)のいれがうもの外山(とやま)の霧(きり)よひ
とくぐんくまきてあくなりて
額(ひたい)ぬきあげしもりつ角(かど)とれ
てもうふ眠(ねむ)るくま枕(まくら)をおどろかさ

国立国会図書館　京伝予誌 208-9

ガラス使用

へ誰そ時宗ふのうねび祐成が幽
霊よもありまじくも時ありてうねび池
の水鶏とも思われど差うつむ
と首をのべたるもいとよく実
に天飛の怪おのづから風
とおとづれ来うぞさてもさても
さてもへんてもなく優に乳の臭さる
臭をうつぬく鳥有ハ一目えるより
乳も魂も天上へ抜でさふふ人仏
花ありありるが彼化物のうち
顔しと思ーさげてやるといふ鳥有かるうぞ懼
ることありれ我く海よりうびうう本家の一門おもも
ちぞ化物屋敷の趣排でもなく
質物の糟あり世のすれうけども

国立国会図書館　京伝予誌 208-9

ガラス使用

のみよぶち教されて儘日の恥辱
うけセツなの義よまづめられて
落もやうぞ流もありへぞ迷ひ君を
るこゝろや八ツ月よをそゞり夫背
より質と云おもさまあらぬで戦
場よ人質あり誼呪よ言質あり
借金と質よとく女房が自腹
と切る時の枠言禁ふして清あの

辛苦と同日の論なりむゝーさる
何某の上人ろうや十会と質よと
さるるのありーが賃を十会の
うち一会とりざさばなるまりて九念
座九会のこまりしなれより今よのこう
寺と云寺号何不れば佛の方便と
さるよりと笑くろうれば佛の方便と
もあり又寿と云字を質よとさる

国立国会図書館　京伝予誌 208-9

ガラス使用

連寸師もあれが風流の友ともあれ
と古人詞子いこがね名を賀るおとな
るゝ噂のり新田義貞いこがねば
くりれおカを相州鎌倉稲村が崎
の海中へ賀よろこびて軍れ利運を
祈神よくぞくれーるものり龍神こ
れと感應して彼太刀海よう浮流
ーとうやこれ賀おれ流るゝとも言

狩りーいけ時よりれるなりくり今
よそゝと賀利ら濱ゝゝもけ所
謂ありそうーえ又賀神とゝよ由
でれ萩の上一揩萩の下賀のり或い
慈と一ノ入くおのり天地も又賀屋
の度といくゝゝゝを受人のあを賀
おとゝゝと火ゐ次ゑ人いあ損萬
金ひいをの損とゝ掲れよゝーく

国立国会図書館　京伝予誌 208-9

ガラス使用

ゐるて或ハ質ヨ曲るとゝ云ひ号
十の字の尻とまくれハ七の字ゝ
ゐる気よりとゝろ〳〵ゐる
よ〳〵七ツ屋ゝ晒落るも則ち更ん
なりそれもそゝよるんでよゐる時ハ
唯ゆひとまけてこゝそれへそれとさ
ゝなりちやれとゝきゝる元まよ
のうゝや唐土よりもりくく。

質店を印子舗ゝゝ云ひ質を典質
ゝゝひ質れを當票ゐるとゝ云俗語
のり固我〳〵ハ物をの身ぐりよ
ちて憂うんゐんとゝ
等をとゝよりのゐるハ
漸よ身をりちぐとゝ
れバ我等をゝゝ
或ハ女郎を身受せんゐよ親ゝ

国立国会図書館　京伝予誌 208-9

ガラス使用

ゆづられ一義を家質よりれ其
又女部も万夫よ招ひてそん探と
あり等駒下駄褌まで質入して苦
界十ヶ年損料屋のあるよくむかり
或ハ初買奥の名代よ給をくめ
そこが江戸子れ尻の穴の廣さを
と隣家れくぞろをそりあぐら
これと唸ひ又ハ二人の娘を人質よ

入て忽妻よりもちこみ又ハ腕のと
づくひある夢をたのそて富のれ玖
買ふ一まん人くりひさあよ原
仕名せの布子を教もあり武士ハ
あまくあるね大小もまげ出家
いとぐふ仏の併像までもまげる
げふ質と並てうひるあさい恩
をうひて当と知くるがごくあり

国立国会図書館　京伝予誌 208-9

ガラス使用

とても我〳〵つうろうまで利
のげとされんよそぐもおられねば此
身も嵐よそひさうれつのよ厳の榊原
の手店よさ〳〵さんけん恨とそう
さんよい貧乏神のお社とあり彼
悪不知の徒が皮肉よりのいう老
く皆等とそう〳〵めん油なとものあ
まうさもせうちの外あれがけるを

かうりそうも世の中れ不埒者ども
よ伝てのこひうけりぐさんあて
のあさ闇雲質をとめ申うれ仏
得さもんく貧乏屋地獄の書附大王
ふもそれいうあをひこれまでも
らられ出さるぞやとヒウドロ〳〵の
おさまりかさりのそこ〳〵ホの
そして南風よあふさ海月のごく

国立国会図書館　京伝予誌 208-9

ガラス使用

国立国会図書館　京伝予誌 208-9

ガラス使用

不レ検ありいろは短冊の古の字
一句よ質屋るやうよそそと女
房といまめーは不宜乎

通用畢

豊後
樂酒亭主意氣席中
此長幕茶番而時語之不肌栁
橋乎有隊日待夜來
末茶飯食乎
人不聞而不喜不亦素人
乎
土佐上下ふ外記袴半太羽織よ義

国立国会図書館　京伝予誌 208-9

ガラス使用

国立国会図書館　京伝予誌 208-9

ガラス使用

梅吉後竹のさゝ
うつとそれいまさら
ぞよへとそ嘆
まそろは浄瑠璃の
クーま浄瑠璃い信
の通女ら年若九浄
ムりとそろそ
なり又極玉浄玉
いのりて迦陵頻伽の藝者でやい時
夜浄るを指て多
がろ或い年季が
までは世界そて金箔とそぐさ
る不舞くはろま識のお書初そ
るきれーなり斯て浄るを世そま
流れて今を中に
りの如来そりり

樂ム余風ありて人を和ぐる器と
樵歌牧笛樂あるこゝろ一固
考據節ハ文章に色欲多く音
声嬌乱ありそれどもそこより処
ふよりてまんざら姑の小云る士
の要云を學よいまし尾藏悔と云よいつ
二ツといえん云尾悔と云よいつ
うおの字れ名とうひてといよ文句

あり曲礼ま女子許嫁して笄而字
此語よめそれり又おまれ浄ありお
唯うむひてるんよもいえびと文
句あり詩曰奏假無言とひよびひ
多一笄ま又さる新戸よ黒格子を
そうらひ竹の管さてそれうけよ
浄ありれ穢ま古ホあり表札よ雑
波津野酒楠と植ム流まてそ

国立国会図書館　京伝予誌 208-9

ガラス使用

そう尖(とが)ったり比(くら)べ
の着いづれも年季(ねん)の
人(しと)の油深(あぶらぶか)のうえそうとしてきそう
しれぬぐひを扇(あふぎ)より一人へ
伊勢(いせ)の布子(ぬのこ)の棒縞(ぼうじま)のあぐれ
とある品も綿(わた)
まぬぐひとそうけいづれも湯(ゆ)
ぐりこんく門口(かどぐち)まで 伊八 サア

添かどんへくらうし 添 マアさきへ
さらうせく 伊 ナンノかまうこといら
ねくさきへさらう 添 コレやア
そぢめてござらさきへく
らう 伊 そんならうし 添 小便を
一つやらうてとう路次(ろじ)のつきあたりのかどうやの四(よつ)
モシそのく小便いありません 伊 ホイ
とりやアはめんなさいひざ

国立国会図書館　京伝予誌 208-9

ガラス使用

ト以ヒろのどぐそのめとを梅さんうちら
これてあまひとこぶれそてあけて
梅 どうみさく 伊 ろうくしちサ 梅 ソヤ伊ハ
さんろめぐんふせくそ 伊 サア 源 を
あぐろうーしトニ人由
ひるーくはさうーくあり屋風い名ひろさそ舎
のをうおでをうろんなふ徒春のようーの
そんよこ味ちんのこの糸をひもようけさうぬら我
ひてのう 梅 へめいうぐれくこ小袖よ
ろをまくいろのけーしさどんをの半とあ
めうひぐくろくてうらでしそれさひっけめ
の路田けびのーやをやくーしやとういろる
そのふをうらてめくーしやとういろるがさませて
梅

伊ハさんけろハおさうくでござやー
さモシおまくこうちうくおりでありせく
源 アイてくうようござ
つうふみさいまくをこしかまさい
伝ハうううーろのそうきまくをる
さんけ男アけうちうなござうぶち
つとるうってんそくしいよろう連れ
てきやしく 梅 よくおふせくしさぬ
へをりやアめうとめうさモシ

国立国会図書館　京伝予誌 208-9

ガラス使用

マアのうとこうちくおさせくし
こうちやアのう伊八さんもきうて
みうおせくもうとうんざらやうかう
のんこやうあれい陳ようおまん
やアやとれうてひ伊武士のたき
やいいうこひねトまりくも梅ヲホこさ
トうう伊コウ添をの
さうんーうは男わうんちうとち

うてはさようさうてきやうう
よこいうあんさアさようさ梅
んようくきてくねトのせ伊コウ
添を氣をうめうちやアいせ
梅をくわうちアあさけりん
さうそれしやアりいのさもへ
りうとうちくおさせくしふよ
ひくいそれて添かやうう
うーうち出て火うちのうくさう伊梅さん

国立国会図書館　京伝予誌 208-9

ガラス使用

此男ア伺しやうくさとゐひなさう
梅 とふもおれやせんとんとをそふまちう
ふせへよほかざりのでこそたそれやさた
そそんやうく 伊 よかひとかきを
ちやアおれうつうアあそさ
おそさよ本茶やそんくされる 岡 伊
八さんおめく清明丹久へ 伊 りんよめ
けうのさうけえそれてきやし

さまざつとれさるアがのる十ばごろ
なのおをそさりせりそのたぎこへ
うう狭よひかうさなぎそさる南一医 梅
さんこりやアこ男がでーうう弟子入の伺サ
トかそ 梅 こりやアりうりなあさ 原ト
をよもおいモしかくさんちとまか
さうしおあくろこそおをそさうけて 毎 こ
しまひとのひくろくさまくさらをて
アやアりうおのりがさふござりま
をトさをうよさがんよひちや
をうーみをてニつんでる南一の

国立国会図書館　京伝予誌 208-9

ガラス使用

国立国会図書館　京伝予誌 208-9

ガラス使用

国立国会図書館　京伝予誌 208-9

ガラス使用

が 毋 それざりよつくとをくらら
おくる〳〵さとびいしやの毋ざけ 母 コウ
かくさんこれ夜会のおりぐそさんせ
トゑよ分をこぐそうるぎのうぐみといぐそて
そろのさけのうぐみといぐそて 毋
こりやアいくれやそちやうどめ
のみもやーく〳〵まいさまいあびのさ
のさをろま 国 わーやうぐでくそろぐ死ざ
ーくさでもいみてそそう 栃 けいこまい

（右ページ下）廿六

あーくさ坂のうちさんへいさやて 母
行をめてよやろ信仏をなそ原
りんごやふトいよろちにツのひやうーホ
伊八もびろそうしてそそ
栃もびろくのいそういまあ
とそれいかりんざら 伊 あん
日本ぐそう仲ろ夜人ぐ
ふそう七ふトとろふ
いふ代おいわくさなあんざアくふ
がのそーいろうとでそ

（左ページ下）千へつ。年町二丁 上子。

（右ページ上）廿五

国立国会図書館　京伝予誌 208-9

ガラス使用

国立国会図書館　京伝予誌 208-9

ガラス使用

いノ梅
まいるよいそのぞんさてやーやう
まいりんりやコリやのののろさちぐ
ざろさささちぐくいせんろかヨウド
あるよやくく梅毋くくまいまようけてーらぬ
ぬちゃんじやからいうよさむいなんじや
るでもかれじ皆此等のてあいさまで稽古を
又指突の箸しくく女義者いろびう
て一夜検校の幸多ーセろひハ
とさろ義もんのろくのろろ」
ろれどろ義でろしく都でろる
と二のろりろもろろ孔雀れる
ぐごろー娘ろ君のごろーろふ
まわれあれいろそろよさせく

国立国会図書館　京伝予誌 208-9
ガラス使用

我まくらの孝行の徳の極まるも
みのうたゞ親の戸下のごとく我
ゐみうやまひうつくしさ三味線第一
をとるをき豹下弦をあをとる皆
欲の皮より出て三弦の皮よりも
あつし又これらがごとりをゞゐ
るふるくるいものよのくび漢
士よてい妓をうたて莫愁陽阿翠

鼈甲ぶちくいふ名妓多し和国にて
白柏子とよびぴ嶋千歳和歌前。か
ど世くよ名あるりのかぞへ尽
雖し今其女藝を其人に謂ツ
べしよ方すてい流れ〳〵流れ
江戸そも前よい踊子とひさり
元文のそゞめふ名をさ衛門。照
艶。ぶぐのりて後。辨天豊。地蔵

国立国会図書館　京伝予誌 208-9

ガラス使用

幸。ゐごそめさり。新富直。百合。秋。ゐごろごろ。唯人の愁と云れをろくれども今ハそこよつゞけ器ゐり。よ比をべき者とこれらぶんごとうんぬ豊後畢

申

町傾城辛酒氣貧通
通一子町馴一染傾一城 馴染ハ三會目
傾曰至不遠千里而來亦將
有以見艶書乎 床花反吟向人 他女卿之文通子在二緩中一
通子妾曰君何必曰茶終爲
賢虚而已矣 茶高虚也
田の中に稚のそ糸立そ六甲ゐ申ゐ

国立国会図書館　京伝予誌 208-9

ガラス使用

和い申し柳のまゆの
花ちる申上ますといひもこゝろをれ
くの男の業うらめくる。
世こゝろすゝ申ますもさめしすゝみき流
の男いうそしりのの考
そのうちまも寄おうく。ほれさ経られ
ぬりのなく。捨てられてきりの
なす。爰ふ去ぬうす板。夫者屋とゝみ

花衣といふ婦婦あり。彼が容
義吉くりの整治あり。書びまられ川
ほまられつゝかの言ふれぬと。捨かつきう。
こうじくく終ふ仲極まく。二人か申
ハ深れぞる。ば州の申販商へ出びまる。
水の又ぬきまる。ふ脇なのかゞまを
やぶんと世ふれ。抱ふまの月法西角を
ふうるこの首りゝ月こゝろまおうを

国立国会図書館　京伝予誌 208-9

ガラス使用

国立国会図書館　京伝予誌 208-9

ガラス使用

今好(すき)この世の中に。又うのさんまつそせよ。
一生連(つれ)そふ女房よ。腎虚(じんきよ)して死ぬる
ぶしやうも。又ハ金(かね)もうけんと
ねつき迎(むかひ)。乳(ち)を吞(のま)ひ乳母(うば)
にて命をうしなふもの。又ハ金(かね)
下駄(げた)も履(はか)ずしまひ女の道(みち)そ
ろ果(はて)る事(こと)なり。世界(せかい)の人皆(みな)その
穴門(あなかど)より生(うま)れ。又その穴門より死(しに)
行(ゆく)。

況(いわん)や根(こん)ごんの道理(どうり)を
わきまへしやつのこと。定(さだめ)て親(おや)
にしたがふ不孝(ふこう)ものなり。二ツの命(いのち)を
一女(いちによ)のあやまち。命(いのち)を死(しに)
骨(ほね)折(おり)ばかりで。ざまア
もく能(よく)あつかい。濃(こい)うのおまつぶ
ものれし。今時(いまどき)の色事(いろごと)の筆(ふで)もおよ
惜(おし)むべき。唯(ただ)自由(じゆう)の刀(かたな)にて死(しに)
又うハ気(き)むすこ娘(むすめ)ハ。ねんごろし

国立国会図書館　京伝予誌 208-9

ガラス使用

国立国会図書館　京伝予誌 208-9

ガラス使用

なく。髪ふる毛穴をかくしと云ぐく体裁。
きんひらものでおりまする。よふこそ
と。切落しでござりやす。
なぐ。なの如くかよふ云ぐくんぬりの
なぐさふ云ぐくそんなるまふおくびそんま
ふ云ぐくきつふさんぬるとのなぐ。いろ

そんのむかんだ。ぐ云ぐくきやういのもとをまふすまふすものぞの
道世(むよ)(そ)のさいど。ここ世ねんぐのさまを
ます。ふ云ふ事なりつこいつの世ふうふね
うまんと。自然(しぜん)(のまん)と回(まわ)りれば。女人(にょにん)云
をまふ。是地獄(じごく)ぐのいふ。そうさいふ
きんぢうをまふすが。そうまやうさ
地ぢやこそうまんぬ死ぬぐ云ぐ

国立国会図書館　京伝予誌 208-9

ガラス使用

国立国会図書館　京伝予誌 208-9

ガラス使用

国立国会図書館　京伝予誌 208-9

ガラス使用

ちりをちらし。被これ
をまねとまねよ和をもめ。まぼろしくくるるへ
立くる。此差等ありうちなるめ。かのいらそ
尼さるもの。今年死もうるおんろん。天命
じやと獨僧さるもの蓮生よ立のよ
二人が延命地蔵尊。利益のおどそおく
つき　申畢

京傳予誌　大尾

自跋

夫西落るおと難し。○黄山谷が曰。
周茂叔が人品甚高し。○胸中洒
落こと支。○光風霽月の如しと。
是等を西落の親玉と謂つ。
然れハ世界ハ洒落悉皆

国立国会図書館　京伝予誌 208-9

ガラス使用

国立国会図書館　京伝予誌 208-9

ガラス使用

208
9

万緑亭連
福神粹語緑　全二冊

山東京傳著述
勧善懲悪
雑話　忠羅川夜舩　全一冊

森中良先生述
千古奇談　梅册席　全二冊

百福壽　五三二町　英

西大人戯作　全一冊

宝永の七福神を金銀珊瑚を
玄武もひ〳〵の姿を写し
女郎うの福茶を
ちゃうら同じなり

無縁の越川舩ぎわ
風風の都合の
と引く夜ふ世の
時よ蔦屋上田文
らりをん
そもいてのひらね

そのさうのおてもや会の
むきのさ気ある
此書ハ英華紙
南仏城ありみ
もるり

山東京傳著述
京傳予誌

京傳閲
遊里文選卧坐

新作
落咄壽類賀紫瓜

尚世ようめく男女の人情
とさぐりそのおろうそ紙を
つて四書のようよめて〳〵譯
しる小冊あり

吉原深川の流行ふうぞひ
放客の風俗と穿遊ふの
一笑を催すてあり

一河斉純通作
名所浮繪鑑
彩色摺一冊

神社仏閣の勧化長生地を安く
尊き本を甚だ安く
仏を面白く入人へ
ふり此書るぐ

讀本
五冊

国立国会図書館　京伝予誌 208-9

ガラス使用

208
9

国立国会図書館　京伝予誌 208-9

ガラス使用

国立国会図書館　京伝予誌 208-9

ガラス使用